

## 民族誌は文明を論じうるか

大西 秀之\*

文化／社会人類学を中心として、民族誌研究は、過去に批判し棄却してきた社会進化論や文化伝播論などとの関係から、非西欧近代における複合社会や国家形成などはまだしも、文明のあり方や形成などを論じることに現在まで極めて消極的である。しかし反面、近年、急激な技術革新や地球環境の変動などに直面するなかで、現代社会の基盤となっている近代文明のあり方を問い直そうとする気運が高まり、文明や人類史を論じた著作が一般社会において注目を集めている。他方で、そうした著作には、民族誌研究に基づく事例や知見が、特定の文化社会的文脈から切り離された上で、断片的に参照、引用され論拠とされている傾向が少なからず散見される。こうした課題を考慮に入れ、本特集では、非西欧近代社会を対象とした民族誌研究に基づき、文明と見なしうる実態や現象が、形成あるいは抑制される諸要因などの検討、追究を試みる。またこのような検討を通して、本特集では、民族誌研究から文明を論じるための視点と、それがもたらす新たな可能性を模索する。

### キーワード

学説史、国家形成、人類史、複合社会、文明論

\* 同志社女子大学

文明は、一般的な日常語彙であるとともに、人文学・社会科学の広範な研究分野において無視しえないテーマとして今日まで論じられてきた (e.g. Childe 1936; Bagby 1958; Quigley 1961; 梅棹 1967; Braudel 1987; Huntington 1996; 伊東 1985)。とはいえ、それらの用法は、必ずしも厳密なものではなく、異分野のみならず同じ研究領域においても、少なからず齟齬が認められる (cf. Vogt 1996; 斎藤・安藤 2003; 平野・吉田・安達 2019)。こうした差異は、概念の未整理もさることながら、文明とされる実態や現象が、時代や地域によって極めて多様なあり方で措定されているからにほかならない。

たとえば、文明とは、大規模人口が集住する都市や記念碑的な巨石建造物などを構築しうる技術的・ハード的要素を評価基準にして定義されるものなのか、あるいは国家や市場経済などの複雑な政治経済機構などを営みうる社会的・ソフト的要素を評価基準にして定義されるものなのか、はたまたそれら双方の要素が一体となって定義されているのか、一般社会のみならず学術研究領域においても、必ずしも十分な共通認識が得られ用いられているわけではない。その反面、さまざまな研究領域のなかで、先史時代以降における文明の成立・展開が活発に議論されたり、「未開」や「非文明」などとも呼称される社会を対象とした研究が推進されたり、とさながら文明は所与の前提のような扱いがなされたりもしている。いずれにせよ、文明は、過去であれ現在であれ、あるなんらかの基準を満たした、あるいは——批判や異論が呈される表現となるが——レベルに達した、人類社会の一階梯と漠然とでも措定されている、と位置づけることにさほどの異論はでないだろう。

ところで、文化／社会人類学をはじめとする既存の民族誌研究は、過去に批判し棄却してきた社会進化論や文化伝播論などとの関係から、非西欧近代における複合社会や国家形成などはまだしも、文明のあり方や

形成などを論じることに現在まで極めて消極的である (cf. 沼崎 2014)<sup>1</sup>。さらには、数千年や数万年という長期間の人類史的な時間軸に位置づけ、文明の形成や展開を思考するアプローチなどは皆無に等しい、といっても過言ではない。というよりも、そうしたアプローチは、ある時ある場で収集された民族誌データを、その背景となる文化的・社会的・時代的な制約やコンテクストから引きはがし、よりによって文明などを論じようなど、文化／社会人類学をめぐる現在の潮流を考慮する限り、あまりにも突飛な企みなのではないか、との疑念を抱かれるのではないだろうか。

しかし、文明論と民族誌の関係は、民族誌研究にかかわる文化／社会人類学などの学説史に目を向けた時、いくぶん違った視角が窺える。というのは、民族誌研究に基づく事例や知見は、特定の文化社会的文脈から切り離された——よりネガティブな表現を取るならば無視された——上で、人類史や文明論のなかで断片的に参照引用され、あまつさえ論拠にされてきたためである。むしろ、こうした人類史や文明論のあり方は、ほかからならぬ文化／社会人類学の草創期の社会進化論に立脚した研究のなかで生産され (e.g. Tylor 1865, 1871; Morgan 1871, 1877)、人文社会学など他分野に影響を与えていったといえる (e.g. エンゲルス 1965 [1909])。

もっとも、このような類の民族誌利用は、当該社会文化の理解を旨とする原理主義的な教義に立脚するならば、眉をひそめ偏向や先入観などの重大な誤謬が孕まれていないか、異端審問官さながらの告発や審理を発したくなるだろう。だが民族誌研究に携わる者が抱くそうした懸念は、昨今、一般社会のみならず学術界でも衆目を集めている人類史的な文明論の著述 (e.g. Diamond 1997, 2005; Harari 2014) を通覧する限り、必ずしも十分に外部に届いているとは思えない<sup>2</sup>。取りも直さず、その理由は、文化／社会人類学をはじめとする民族誌研究において、過去に批判し棄却した——西欧近代社会を頂点として人類社会を「未開」から「文明」

1 文化／社会人類学において「文明」や「文明社会」が対象とされなくなった学説史背景に関しては、本特集所収の拙稿で議論を行っている。詳細は、そちらを参照されたい。

2 たとえば、J. ダイヤモンドの『Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies. (邦題：銃・病原菌・鉄：1万3000年にわたる人類史の謎)』(Diamond 1997) に関しては、人文社会学から自然科学までの幅広い研究分野で毀誉褒貶の論評が、国内外のさまざまな学術誌や商業誌でなされているが (cf. 二村ら 2012)、いわゆる文化／社会人類学からは B. フェーガソン (Ferguson 1999) が比較的短文の賛辞を送っているのみで低調である。ただ同書のなかには、ニューギニアの事例を中心として、時空間のコンテクストを無視した多分に軽率な民族誌の用法が散見される (e.g. Diamond 1997: 4-5)。また Y. N. ハラリの『Sapiens: A Brief History of Humankind. (邦題：サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福)』は、民族誌データなどの出典を十分に明示することなく、狩猟採集民の「労働時間」、「人口」、「戦争」などを論じている (e.g. Harari 2014: 46-73)。文化／社会人類学からの論評として C. R. ホールパイクが、本書の独自の主張には誤謬が多く、時には深刻な問題が孕まれている、と民族誌に関する知識のなさを絡め厳しく指摘している (Hallpike 2017)。

の一系列の発展として描いた (Spencer 1860; Stocking 1968: 38) ——社会進化論に対する学説史上の呪縛があり、人類史的な観点で文明を論じることを忌避しているため、同業者のみが共有する内言にとどまっているからにほかならない。

こうした状況を考慮するならば、文明論に対峙しないことで、反って民族誌研究が積み重ねてきた成果、取り分け文化／社会人類学にとってレゾナントルといっても過言ではない、社会進化論などに孕まれていた西欧近代社会の自文化中心主義に対する批判が、他の研究分野や一般社会に伝わらなくなってしまっている。文明論に対して批判的であるがゆえに、軽々に民族誌を用いて論ずることに自制的になり、肝心の誤謬の訂正や批判そのものの理論的背景が外部に伝わらない、という最も避けるべき矛盾した事態に陥っている。とすれば、文化／社会人類学をはじめとする民族誌研究が、文明を論じることを批判し自制的になるに至った議論を、今日注目されている文明論に対して提示し、改めて問い質す必要があるだろう。

いっぽう、民族誌研究は、実はこれまで一貫して文明と対峙してきた、と見なすことができる。というのは、民族誌研究が積極的に対象としてきた「未開」や「周辺」などと呼び習わされる社会は、非西欧近代社会であると同時に、その文明に多大な影響を受け変容し、終には包摂される過程にあったからにほかならない (e.g. Asad 1973; Lewis 1973; Stocking 1991)。思い起してみれば、植民地主義や開発、あるいは世界システムやグローバリズムなど、民族誌フィールドで直面し議論してきた現象やテーマは、どれもが近代文明に起因する一断面である。視点を変えれば、民族誌研究は、「非文明」をメインフィールドとして、「文明」とされる実態や現象を描き出してきたともいえる。

ちなみに、2000年代以降、文明が関心を集め議論されている背景には、次のような二つの要因が考えられる。まず一つは、急激な技術革新や地球環境の変動などに直面し、現代社会の基盤となっている近代文明のあり方を、改めて問い直そうという気運である<sup>3</sup>。いま一つは、遺伝子の解析や考古学的調査の進展などに

より、過去から現在までの人類の営みに関する知見が飛躍的に増加し、文明を再考するための学術的なデータが急激に蓄積していることがあげられる<sup>4</sup>。前者に関しては、文明論の枠組みで意識的に議論はなされていないものの、既に民族誌研究としての取り組みが推進されていることから、そうした研究に参画することに異論の余地はないだろう。また後者に関しては、どれほど科学的・学術的な新知見に基づこうとも、誰しも無意識に囚われている自文化の視角が、文明の評価や解釈などに介在している可能性を排除できないため、民族誌研究が積み上げてきた自文化中心主義批判などを用いて検証する意義は決して小さくないだろう。

以上を考慮するならば、文明を論じることは、文化／社会人類学をはじめとする民族誌研究にとって、時計の針を巻き戻すことではなく、止まっていた時計の針を動かすことになる、というのが本企画を立案した動機である。このような視角の下、本特集では、文明と見なされる社会の形成要因や、逆に文明とされる社会に形成が促されなかった要因などを、各地域の歴史的・文化的な文脈のなかで追究する。また可能であれば、従来の民族誌研究が忌避してきた比較的長期間の時間軸で考察を試みる。このような検討を通して、本特集では、非西欧近代社会を対象とした民族誌研究の成果から、文明とされる実態や現象を論じる視角を提示するとともに、人類史的な基盤に立った民族誌研究の新たな可能性を模索する。

具体的には、本特集に収録されている五つの論考によって、民族誌を基に文明を論じる新しい展開と意義を追究する。なお一部の論考では、考古学や民族史のデータや成果を参照、導入しているが、それらは民族誌研究をあくまでも基盤としたものである。換言するならば、民族誌研究を基に文明ないし文明社会を論じるために、考古学や民族史など他領域の必要な情報を取り入れたと表現できる。

まず拙稿では、文化／社会人類学などの学説史の検討を通して、どのように文明が民族誌研究のなかで位置づけられ、いかに議論されてきたか把握するとともに、文明概念などの検討を行い、民族誌フィールドに

3 地球温暖化に起因する気候変動、情報技術の加速的革新による技術的特異点、遺伝子操作に対する生命倫理など、近代科学技術に立脚する文明社会のあり方が問われる要因や状況は、今日枚挙にいとまがなく、隣接領域を含め文化／社会人類学にとっても無視しえない動向となっている (e.g. Ruddiman 2013; Simmons 2008; Shanahan 2015)。

4 具体的には、DNA分析の急速かつ劇的な進歩、環境考古学をはじめとする古環境復元の発展、一国史を超えたグローバルヒストリーの推進など、人類史的な視角で文明を考察するための研究成果が、日進月歩の勢いで蓄積されている (O'Rourke 2019; Hussain and Riede 2020; Conrad 2016)。

において文明にアプローチするためには、既存の理論や方法を用いるべきことを指摘する。その上で、民族誌研究に基づく文明論は、文化を身に付けた現地の人びとの日々の営みから、文明と見なしうる実態や現象にアプローチすべきことを提起する。同論考では、既存の研究分野が過去に遺棄してきた文明をめぐる諸課題の再考を促すとともに、文明論は人類史的な時空間軸に民族誌研究の視角を拡張させる、従来経験したことのなかったような新たな契機となりうることを最終的に指摘する。

須田一弘の論考が対象とするのは、パプアニューギニアの熱帯雨林に暮らし、半遊動的生活を送るクボである。同集団は、植民地政府と関わる以前まで強い平準化志向に基づく「平等な社会」を維持してきた。またそうしたクボの平準化志向は、資源利用における非所有者への利用権の柔軟な拡張をはじめ、姉妹同時交換婚や邪術に基づく死の概念などにも関連している。このような平準化に関する社会実践の分析を通して、須田は、必ずしも階層化を促さない社会のメカニズムを追究するとともに、国家に包摂されたことにより引き起こされた変化を検討する。須田の論考は、「非文明」から逆照射することにより「文明」の理解を試みる、まさに民族誌研究に立脚した一つの典型事例といえる。

清水展は、ピナトゥボ火山の1991年の大噴火によって被災し、国民国家フィリピンのマジョリティである平地民社会との接触、包摂を余儀なくされた、「アジア系ネグリート」とされるアエタのレジリエンスを検討している。清水によれば、被災したアエタは当初フィリピン政府が造成した平地民の村に近い再定住地に移住し、政府や国内外のNGOの支援を受け暮らしていたものの、それらが滞るようになると、農業労働や各種雑業に就いて現金を得るとともに、現金収入が見込めない場合には一時的に山地に戻り、既存の生業活動である焼畑と採取採集によって食料を確保していたことを指摘する。こうしたアエタのライフスタイルは、状況に応じて食料確保のための手段を多様化し危機に対処する柔軟な生存戦略であるとともに、文明社会に参入する際の周辺民族の適応戦略でもあることを示唆している。

稲村哲也の論考は、民族誌研究と考古学の共同によって、アンデスの古代文明形成期の権力形成にラクダ科の家畜リヤマが果たした役割を追究したものである。まず稲村は、ペルー南部山岳地域における先住民社会における民族誌データを提示し、リヤマの家畜化

の起源、ペルー北部の文明形成期の農耕や交易に果たした役割、肉や獣毛の利用、儀礼での供儀などに関する考古学の研究成果を把握する。その上で、民族誌研究は、考古学データからは観察できない、トウモロコシ畑の刈り跡の利用やキャラバンによる運搬ルート、といったラクダ科家畜の利用と牧民の活動の実態を提供することにより、ペルー北部高地における複合社会および政治権力の生成とリヤマの飼養の関係の究明に貢献しうることを提示する。こうした論考は、民族誌研究による過去の文明形成に対するアプローチにほかならない。

池谷和信は、考古学の研究や既存の民族誌資料を整理し、新石器時代から現在までの南米アマゾンにおける社会の複雑化を検討している。その結果、アマゾンの諸社会は、農耕定住と氾濫原漁撈を組み合わせた複合社会、ヴァルゼア（氾濫原）に適応した農耕社会、テラ・フィルメ（冠水しない台地）に適応した狩猟採集や焼畑農耕の社会、という三つに分類されることを指摘する。その上で、アマゾンにおける社会の複雑性は、狩猟採集社会から農耕社会を経て複合社会に至る、という社会進化的な図式に収まるものではなく、多様な環境に対して生態文化的に適応してきた帰結である、という想定を提示する。池谷の論考は、民族誌事例を人類史的な視野に位置づけ、社会の複雑化を追究した事例といえる。

以上のように、本特集では、個々の論考で試みられている多様なアプローチによって、民族誌研究によって文明を論じる可能性を追究する。だが今回提示したアプローチが、文明を論じるためのすべてとも、ましてや最善のものとも考える必要はない。さらには、本特集の各論考が、文明なる実態や現象を十全に捉えている、という確証などどこにもない。というのも、民族誌研究に基づく文明論は、可能性を追究し尽くしたとも、一定の成功事例が得られたとも、到底言えない状況だからである。とりわけ、文明論を実現するために不可欠となる、考古学や民族史などの隣接分野のデータや成果を、どのように民族誌研究に取り入れ咀嚼し、統合すべきかに関しては、文化／社会人類学などの研究領域そのものにとって議論すべき、これからの新たな課題といえる。

とはいえ、文明を論じることは、民族誌研究に新たな視角をもたらすとともに、人新世（アンソロポシオン）やシンギュラリティ（技術的特異点）などが関心を集め、近代文明の行き詰まりをひしひしと実感して

いる現代社会にとっても、意義ある知見を提示しうるだろう。もっとも、そのためには、文化／社会人類学をはじめとする民族誌研究が、止めていた時計の針を再び進め、文明という困難でありつつも豊饒な対象と格闘する覚悟が必要となる。本特集は、その礎とならんことを願っている。

### 謝辞

本稿は、日本学術振興会 (JSPS) 科学研究費 JP19H05735 「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」、JP19H05731 「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」を受けた研究成果の一部である。

### 参考文献

(日本語文献)

伊東俊太郎

1985 『比較文明』、東京大学出版会。

梅棹忠夫

1967 『文明の生態史観』、中央公論社。

エンゲルス, フリードリヒ

1965 『家族・私有財産・国家の起源：ルイス・H・モーガンの研究に関連して』戸原四郎 (訳)、岩波書店 (Engels, Friedrich 1909 *The Origin of the Family, Private Property and the State*. Chicago: C. H. Kerr & Company)。

斎藤修・安藤豊

2003 「現代世界理解を目的とする世界史の構想：「文明論」による授業構成」『北海道教育大学紀要 教育科学編』54(1): 1-86。

沼崎一郎

2014 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討(2)：『未開人の心性』1938年版を中心に」『東北大学文学研究科研究年報』63: 72-104。

平野葉一・吉田欣吾・安達未菜

2019 「文化・文明の相互関係に関する一考察」『東海大学紀要 文学部』109: 1-19。

二村太郎・荒又美陽・成瀬厚・杉山和明

2012 「日本の地理学は『銃・病原菌・鉄』をいかに語るのか：英語圏と日本における受容過程の比較検討から」『E-journal GEO』7(2): 25-249。

(外国語文献)

Asad, Talal (ed.)

1973 *Anthropology and the Colonial Encounter*. London: Ithica Press.

Bagby, Philip

1958 *Culture and History: Prolegomena to the Comparative Study of Civilizations*. London: Greenwood Press. (1976 『文化と歴史：文明の比較研究序説』山本新・堤彪 (訳)、創文社)

Braudel, Fernand

1987 *Grammaire des Civilisations*. Paris: Arthaud. (1995-1996 『文明の文法 (I・II)』松本雅弘 (訳)、みすず書房)

Childe, Vere Gordon

1936 *Man Makes Himself*. London: Watts & Company. (1951 『文明の起源 (上・下)』瀬津正志 (訳)、岩波書店)

Conrad, Sebastian

2016 *What Is Global History?* Princeton: Princeton University Press.

Diamond, Jared

1997 *Guns, Germs and Steel: A Short History of Everybody for the Last 13,000 Years*. New York: W. W. Norton & Company. (2000 『銃・病原菌・鉄：1万3000年にわたる人類史の謎 (上・下)』倉骨彰 (訳)、草思社)

2005 *Collapse: How Societies Choose to Fail or Succeed*. New York: Viking Press. (2005 『文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの (上・下)』楡井浩一 (訳)、草思社)

Ferguson, Brian

1999 Reviewed Work: *Guns, Germs, and Steel* by Jared Diamond. *American Anthropologist*, 101(4): 900-901.

Hallpike, C. R.

2017 A Response to Yuval Harari's 'Sapiens: A Brief History of Humankind'. *New English Review*, December ([https://www.newenglishreview.org/C\\_R\\_Hallpike/A\\_Response\\_to\\_Yuval\\_Harari's\\_'Sapiens:\\_A\\_Brief\\_History\\_of\\_Humankind/](https://www.newenglishreview.org/C_R_Hallpike/A_Response_to_Yuval_Harari's_'Sapiens:_A_Brief_History_of_Humankind/))

Harari, Yuval N.

2014 *Sapiens: A Brief History of Humankind*. London: Harvill Secker. (2016 『サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福 (上・下)』柴田裕之 (訳)、河出書房新社)

Huntington, Samuel P.

1996 *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*. New York: Simon & Schuster. (1998 『文明の衝突』鈴木主税 (訳)、集英社)

Hussain, Shumon T. and Felix Riede

2020 Paleoenvironmental Humanities: Challenges and Prospects of Writing Deep Environmental Histories. *WIREs: Climate Change*, 11(5): 1-18.

Lewis, Diane

1973 Anthropology and Colonialism. *Current Anthropology*, 14(5): 581-602.

Morgan, Lewis H.

1871 *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.

1877 *Ancient Society*. New York: Henry Holt and Company. (1958 『古代社会 (上・下)』青山道夫 (訳)、岩波書店)

- O'Rourke, Dennis H. (ed.)  
2019 *A Companion to Anthropological Genetics*. Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Quigley, Carroll  
1961 *The Evolution of Civilizations: An Introduction to Historical Analysis*. New York: Macmillan Company.
- Ruddiman, William F.  
2013 The Anthropocene. *Annual Review of Earth and Planetary Sciences*, 41: 45–68.
- Shanahan, Murray  
2015 *The Technological Singularity*. Cambridge: The MIT Press.
- Simmons, Danielle  
2008 Genetic Inequality: Human Genetic Engineering. *Nature Education*, 1(1): 173.
- Spencer, Herbert  
1860 The Social Organism. *Westminster Review*, 73: 51–68.
- Stocking, George W., Jr.  
1968 *Race, Culture, and Evolution: Essays in the History of Anthropology*. New York: Free press.
- Stocking, George W., Jr. (ed.)  
1991 *Colonial Situations: Essays on the Contextualization of Ethnographic Knowledge (History of Anthropology, Vol.7)*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Tylor, Edward B.  
1865 *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization*. London: John Murray.  
1871 *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom*. London: John Murray. (1962 『原始文化：神話、哲学、宗教、芸術そして習慣の発展の研究』比屋根安定 (訳)、誠信書房)
- Vogt, Emily A.  
1996 Civilisation and Kultur: Keywords in the History of French and German Citizenship. *Ecumene*, 3(2): 125–145. (2012 「文明と文化：フランスおよびドイツ市民権の歴史におけるキーワード」成瀬厚 (訳)、『空間・社会・地理思想』15: 93–108)

---

## Can Ethnography Depict Civilisation?

Hideyuki ŌNISHI\*

Ethnographic research, particularly sociocultural anthropology, has been extremely reluctant to discuss civilisations, except for complex societies and state formations in non-Western, owing to its theoretical relationship with social evolutionism and cultural diffusionism that were criticized and dismissed in the past. However, in the face of various issues caused by rapid technological innovation, global environmental change and the like, interest has been drawn to the reexamination of the modern civilisation as the basis of the contemporary society in recent years, and books about civilisation and human history have been attracting attention in the general public. In addition, there is a tendency in these works to refer to fragmented ethnographic case studies and findings as grounds for arguments in isolation from their specific cultural and social contexts. Considering the problems above, this special issue attempts to elucidate the factors that form or suppress the social conditions and phenomena regarded as civilisation, based on ethnographic research on non-Western societies. Through such examinations, this special issue explores the perspectives for discussing civilisation from ethnographic research and the new possibilities it brings.

### Keywords

doctrinal history of sociocultural anthropology, state formation, human history, complex society, civilisation theory

---

\* Doshisha Women's College of Liberal Arts